九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

歐陽脩の『居士集』編纂の意圖

東，英寿
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/9716

出版情報：中国文学論集. 17, pp.15-41, 1988-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

歐陽脩の『居士集』編纂の意圖

東　英　壽

序　言

一般に、作者は作品をほぼ作り上げた後、多くの場合、それを更に少しずつ修正加筆し、より高い完成を目指して連續的營爲を行なう。かかる純化の辨證法は、推敲と言われる作業であるが、北宋の文人歐陽脩は、とりわけ推敲に次ぐ推敲を重ね、その生涯をかけて、より完成度の高い作品を創り上げようとした人物である。後に『歐陽文忠公文集』を編輯した南宋の周必大は、その後序（平園續稿卷十二所收）に於いて、歐陽脩の推敲の有様を次の如く述べる。

公は文を作るに、之を壁間に掲げ、朝夕改定す。

この様に一篇の作品を完成させる場合のみならず、彼はその晩年、自身の文集に以前の作品を收錄する際にも、その作品の内容・表現を一再ならず檢討し直し、手ずから『居士集』五十卷を完成させた。即ち『居士集』こそは、歐陽脩自身の手によって編纂された唯一の詩文集なのである。從って、この文集の編纂意圖を明らかにするこ

とは、『居士集』に未收錄の作品を含めた彼の數多い詩文を理解するうえに於いても、缺かすことのできない重要なテーマであると考えられる。

そこで小論では、歐陽脩が自己の詩文集を編纂する過程に於いて、先行作品の內容や表現について、如何なる部分を削除し、あるいは書き直したのかということに着目して考察し、あわせてそこから『居士集』五十卷の編纂に臨んだ彼の意氣を窺おうと思う。

一

今日、我々の見ることのできる歐陽脩の著述は、南宋の周必大（一一二六―一二〇四）らの編輯した『歐陽文忠公文集』一百五十三卷にほぼ網羅されている。歐陽脩自身が編纂した『居士集』五十卷は、この『歐陽文忠公文集』卷一――卷五十に收錄されている。

そこで先ず、『居士集』五十卷・詩文七百六十六篇の構成について、卷一から順にまとめると次の如くである。

- 卷一――九　古詩二二九首
- 卷十――十四　律詩二九三首
- 卷十五　賦五篇、雜文五篇
- 卷十六・十七　論一〇篇
- 卷十八　經旨一一篇、辯一篇

◦巻十九	詔册六篇
◦巻二十——二十三	神道碑銘一一篇
◦巻二十四・二十五	墓表一四篇
◦巻二十六——三十七	墓誌銘七一篇
◦巻三十八	行状二篇
◦巻三十九・四十	記一八篇
◦巻四十一——四十三	序二四篇
◦巻四十四	序六篇、傳一篇
◦巻四十五・四十六	上書二篇
◦巻四十七	書八篇
◦巻四十八	策問一二篇
◦巻四十九・五十	祭文三七篇

收録された作品の制作年代は、大凡彼二十五歳から晩年の六十四歳までの四十年の長きに亙っており、制作年に偏りは見られない。

ところで、『居士集』五十巻が歐陽脩自身の手によって編纂されたことについては、胡柯の「歐陽文忠公年譜」や陳振孫の『直齋書錄解題』等に記事があるが、[1] 次に擧げる『文獻通考』巻二百三十四、經籍考六十一の記事には、

石林葉氏の言葉を引いて以下の様に述べる。

石林葉氏曰く、歐陽文忠公晩年に平生爲る所の文を取りて、自ら編次す。今の所謂『居士集』は、往往にして一篇は數十たび過ぐるに至る。累日去取するに決する能はざる者有り。

ここから、歐陽脩が『居士集』を編纂したのは、彼の晩年であることが窺える。ところで陳尙君は、「歐陽脩著述考」[2]に於いて、『居士集』所收の作品中で、一番最後に作られたものは、卷四十四の「薛簡肅公文集序」であると指摘する。その脫稿は、この作品中に歐陽脩自身が記している様に、熙寧四年（一〇七一）五月である。更に『居士集』の各卷末には、歐陽脩が息子の發らと『居士集』を編纂し終わった年月が附してあり、それには熙寧五年（一〇七二）秋七月とある。[3]だとすれば、『居士集』の編纂期間は、その最後の作が完成し終わった熙寧四年五月以降、翌熙寧五年秋七月までの大凡一年有餘であると考えられよう。そして、この『居士集』が完成した翌月、卽ち熙寧五年閏七月に、歐陽脩は六十六歲で沒した。いわば彼は、燃え盡きようとする生命の火を予感しつつ、『居士集』編纂に專心し、まさしく『居士集』の完成とともに、遂にその炎を燃燒し盡くしてしまったのである。

歐陽脩が『居士集』を編纂する際に、以前の作品の幾篇かに手を加えた經緯について、周必大は「歐陽文忠公集後序」（平園續稿卷十二）のなかで次の様に言う。

惟だ『居士集』のみ公の決擇を經、篇目は素より定まれり。而して衆本を參考すれば、其の辭を增損すること百字に至る者有り。後章を移易して前章と爲す者有り。皆已に其の下に附注す。「正統論」・「吉州學記」・「瀧岡阡表」の如きは、又迥然として同じからざれば、則ち『外集』に收實す。

『居士集』編定の際に、既に完成していた先行作品に筆を入れた結果、作品のうちの幾篇かは字數が増減し、幾篇かは文章構成に修改が施されたのである。たとえば、後述する「正統論」は、文章の一部が書き替えられた後に、『居士集』に收錄された。書き替えられる以前の作品は、後に周必大らによって全て『居士外集』に收められている。しかも周必大らは、『歐陽文忠公文集』一百五十三卷を編輯する際に、當時流傳していた諸本によって『居士集』を丹念に校訂し、歐陽脩がかかる文集の編纂に當って書き替えたり削除した作品について、『居士集』五十卷の各卷末に逐一校勘記を附し、指摘した。この校勘によって、歐陽脩が『居士集』編纂の際に、手を加えた箇所が明確に我々の眼前に浮かび上がってくるのである。

ここで確認のために、周必大らによる『歐陽文忠公文集』編纂の經緯について、簡單にふれておこう。この文集は、南宋の政治家であり文學者である周必大を中心に、孫謙益・丁朝佐・曾三異らによって、南宋の紹熙二年（一一九一）から慶元二年（一一九六）までの、實に六年閒の長きに亙って編輯された。しかも、かかる『歐陽文忠公文集』は、先行する十數以上の諸本を入念に校訂しており、加えて『居士集』各卷末に附する校勘にみられる周必大らの考証は特に綿密である。それ故、極めて信頼するに足るものがあり、さればこそこの周必大らの南宋本が、後の歐陽脩文集の版本の決定版となって今日に傳わっているのである。(4)

さて、周必大・孫謙益・丁朝佐らの附した『居士集』五十卷の各卷末の校勘記を通覽すると、諸本閒に於ける字句の異同の指摘以外に、次の四箇所に於いて、歐陽脩が『居士集』編纂に當って作品を入れ替えたり、書き直したという注目すべき指摘がある。それは、卷十六「正統論」、卷十七「本論」、卷十八「易或問」、及び卷三十九「吉

州學記」である。

小論では、このなかで特に修改の跡が顯著で、且つ『居士集』編纂に於ける歐陽脩の意圖を具體的に見出し得るものとして、「正統論」・「本論」・「易或問」の三作品を直接の考察對象とする。卷三十九の「吉州學記」については、校勘記に據ると、當時初稿と決定稿との二篇が世間に傳わっており、歐陽脩は當然の如く決定稿のみを『居士集』に收めたのであった。『居士集』から漏れた初稿は、『居士外集』に收錄され、決定稿と共に今日に傳わっており、上記三作とはいささか樣相を異にする。從って、これについては稿を改めて論じることにしたい。

そこで、先に擧げた「易或問」・「本論」・「正統論」に於いて、『居士集』編纂に當り、歐陽脩が如何に手を加えたのかということを明らかにしておきたい。先ず「易或問」に於いては、既に完成していた三篇の作品のうち、一篇を削り、それを別の一篇と差し替えた。削られた一篇は、今『居士外集』に收められている。「本論」は、もともと上・中・下の三篇であったけれども、歐陽脩は『居士集』編纂の際、上一篇のみを削除した。この一篇も、『居士外集』に收錄されている。「正統論」の場合は、前二例よりやや複雜である。卽ち、歐陽脩は「正統論」に關する十一篇の作品を、削除したり書き直すことによって、五篇に整理して『居士集』に收錄した。元の作品は、如上の場合と同樣に今日『居士外集』に集められている。以上の三例が、歐陽脩が『居士集』編纂時に先行作品を修改した最も大きく、かつ看過することのできない事例である。

小論では、こうした事例に着目し、歐陽脩が自身の文集を編纂する際に、どうしてこの樣に自らの先行作品を改めようとしたかについて、以下の各章に於いて、それぞれ『居士集』所收の作品と元の作品（『居士外集』所收）と

を具體的に比較することによって、明らかにしてゆきたい。

二

先ず、「易或問」について考えてゆくことにしよう。

「易或問」は、歐陽脩自身の編纂による『居士集』の巻十八に三篇、及び『居士外集』巻十に一篇收錄されている。このことについて、『歐陽文忠公文集』を編輯した孫謙益らが、『居士集』巻十八の巻末に附した校勘記には、

初め、公「易或問」三篇を作る。第二篇は、卦爻彖象を論ず。其の後、刪去し、別に一篇を作り繫辭を論ず。此の巻に載する所、是れなり。元の卦爻彖象を論ずる一篇は、諸本皆載せず。恐らくは、遂に棄遺さる。今、外集第十巻に編入す。

と述べる。卽ち「易或問」は、本來『居士集』所收の其の一、其の三、及び『居士外集』所收の一篇（以下、舊・其の二と呼ぶ）が先に創作されており、その後久しくして、今の『居士集』所收の其の二（以下、新・其の二と呼ぶ）が作られたのがわかる。つまり歐陽脩は、『居士集』を編纂する際に、「易或問」其の一、舊・其の二、其の三の一連の作品のうち、舊・其の二を削除し、その部分に新・其の二を補塡したのであった。

そこで本章では、歐陽脩がなぜ舊・其の二を新・其の二と入れ替えたのかということを、この二作品を相互に比較することによって明らかにしたい。

先ず、「易或問」其の一、其の三の內容について簡單にまとめておくと、其の一では大衍の數が筮占の一法に過

ぎず、易の末であると述べる。また其の三では、具體的に大衍に論及し、その法は是であり、その言は非であることを論證する。

次に、本章に於いて直接の考察對象である「易或問」舊・其の二に視點を移すと、歐陽脩は主として卦爻彖象について論述する。がしかし、このなかで繫辭に言及して次の様に述べているのは、とりわけ注目すべきである。曰く、

或ひと問ひて曰く、今の所謂繫辭は果して聖人の書に非ざるか。曰く、是れ講師の傳にして、之を大傳と謂ふ。其の源は、蓋し孔子より出でて、易師に相傳ふるなり。其の來れるや遠く、其の傳ふるや多し。其の閒、轉た失して增加する者、怪しむに足らざるなり。故に聖人の言有り、聖人の言に非ざる有り。

歐陽脩は、繫辭には聖人の言と、そうでない雜言とが混じっていると主張する。繫辭の源は孔子より出てはいるが、その後易師に傳達していく閒に、孔子の原作は愈々失われ、後世の說が付け加わったのだと指摘するのである。一方、『居士集』編纂の際に、歐陽脩がこの「易或問」舊・其の二に代わって、新たに插入した新・其の二に於いては、繫辭について冒頭に次の如く言う。

或ひと問ふ、繫辭は果して聖人の作に非ずして、前世の大儒君子の論ぜざるは何ぞや。曰く、何ぞ繫辭のみに止まらんや。……十翼の說、何人より起るかを知らず。

ここから、當時の通說である十翼孔子作說に敢然と對峙せんとする彼の迫力が感じられる。周知の如く、中國經學史上に於いて、十翼が全て孔子の作ではないとする見解は、歐陽脩によって初めて提唱された。この「易或問」新・其の二に於いて、彼は繫辭が孔子の作ではないと明確に斷言し、のみならず十翼全體が聖人の作ではないと銳

く指摘したのである。言うまでもなく、既にみてきた様に「易或問」舊・其の二のなかで、繫辭に疑義を呈したこと自體、當時に於いては確かに畫期的な見解ではあったが、この新・其の二に於いて、彼は更にその見解を敷衍させ、繫辭を含む十翼全てに疑問を投げかけたのであった。このことが、「易或問」舊・其の二と新・其の二との決定的な相違である。言い換えれば、「易或問」舊・其の二では、繫辭のみを問題としていたけれども、新・其の二に於いては、繫辭を含む十翼全體に視座を移し、それら全てを聖人の作ではないと斷言したのである。ここから、「易或問」舊・其の二を創作した後、新・其の二を執筆するまでの間に、歐陽脩自身が『易』に對する見解を、更に大きく發展させたことが如實に窺えるのである。

そこで、彼が『易』に關する見解を、かくの如く發展させるに至った經緯について、少しく考えてみたい。歐陽脩が「易或問」其の一、舊・其の二、其の三を作ったのは、胡柯に據ると、[5] 景祐四年（一〇三七）三十一歳の時であり、流謫地夷陵に於いてであった。この夷陵の地での學問研究は、既に拙稿「歐陽脩の夷陵貶謫と古文復興運動」[6] のなかで論及した如く、以後の彼の經學研究の實質的な出發點となったのである。その後も彼は、絶え閒なく經學の探求を推し進めた。かかる經書研究に對する、彼の竝々ならぬ傾倒ぶりが窺えるものとして、たとえば「讀書」詩（居士集卷九）が擧げられる。

正經首唐虞　正經は唐虞に首まり
僞說起秦漢　僞說は秦漢より起こる
篇章異句讀　篇章、句讀を異にす

解詁及箋傳　解詁と箋傳と
是非自相攻　是非自ら相攻め
去取在勇斷　去取するは勇斷に在り
初如兩軍交　初めは兩軍の交わるが如く
乘勝方酣戰　勝ちに乘じて方に酣戰たり
當其旗鼓催　其の旗鼓の催すに當りて
不覺人馬汗　人馬の汗を覺えず
至哉天下樂　至れる哉（かな）　天下の樂しみ
終日在几案　終日、几案に在り

これは、彼晩年の五十五歳の時の作である。歐陽脩は、自己の經學探求の有様を戰場に於ける戰いにたとえており、しかも、それは最上の喜びだと言う。ここに、彼の經書の研究に邁進する勢いがまざまざと感じられる。この様に歐陽脩は、夷陵貶謫以降晩年に至るまで、生涯絶えることなく經典に對する研鑽を積んでいたのである。されば こそ、こうした經學研究の成果の一つとして、彼は自身の『易』に關する代表作とも言うべき『易童子問』三卷を創出したのであった。そのなかで、注目すべき見解は、『易童子問』卷三の冒頭に於いて次の如く論じていることである。

童子問ひて曰く、繫辭は聖人の作に非ざるか。曰く、何ぞ獨り繫辭のみならんや。文言說卦而下、皆聖人の作

に非ずして、衆説淆亂し、亦た一人の言に非ざるなり。

この様に繫辭のみならず、文言説卦より以下十翼全てを聖人の作でないとする見解は、既に言及した「易或問」新・其の二と完全に一致している。この『易童子問』は、もちろん夷陵貶謫以降、『居士集』編纂以前に完成していたけれども、ただ具體的にいつ頃作られたのかということは明確ではない。従って、『易童子問』三卷と「易或問」新・其の二の執筆の先後も詳らかではない。しかし、ここではそれは問題でなく、むしろ頗る重要な鍵となるのは、これらの作品相互に密接な繫がりがあるということである。つまり、彼は夷陵で『易』に關心を抱いた後、更に研鑽を積み重ね、遂に『易童子問』、「易或問」新・其の二という作品で通説を打ち破り、自身の『易』に對する見解を確立させたのだと言えよう。

前述した如く、歐陽脩はその晩年、『居士集』を編纂する際に、「易或問」其の一、舊・其の二、其の三の一連の作のうち、舊・其の二を削除し、新たに新・其の二を加えた。かくの如き修改作業を行なった彼の意圖は、既に論述したことから分明な様に、彼自身の『易』に對する見解が一段と發展したことと大きく關わっている。即ち、「易或問」舊・其の二では、繫辭に注目するのみであったが、その後の繼續的探求によって、繫辭のみならず十翼全體に視座を据えて、それら全てを孔子の作ではないとする畫期的な見解を打ち立てた。これは、『易童子問』三卷という形で集大成され、發表された。そして、最晩年に『居士集』を編纂した際、「易或問」舊・其の二は、確かにその見解自體に閒違いはなかったけれども、しかし歐陽脩にとって甚だ物足りない内容となってしまったのである。故に、彼の『易』に對する見解の集大成である『易童子問』と同様の論述を展開する「易或問」新・其の二

と差し替えたのだと言えよう。

してみれば、歐陽脩が「易或問」舊・其の二を新・其の二と差し替えたのは、他でもなく彼が若い頃の『易』に對する考え方を、晩年に至るまでに更に發展させ、遂に中國經學史上に於ける畫期的な見解を創出したためである。さすれば、歐陽脩は「易或問」を入れ替えたことによって、搖ぎ無く確立した自身の『易』に對する見解を、いわば萬華鏡の如く『居士集』に集約發展させようと意圖したのではなかったか。

三

『歐陽文忠公文集』一百五十三卷の編者の一人である丁朝佐は、「本論」について、『居士集』卷十七に附する校勘記に於いて、

> 考ふるに「本論」は、初め上・中・下篇有り。此の卷に載する所は、卽ち中・下二篇なり。其の上篇は、『居士集』を編する時、削去すと雖も世に傳はる。今、外集に附す。

と述べる。つまり、『居士集』編纂時に、歐陽脩は「本論」三篇のうち、その上篇を削除し、中・下二篇のみを收錄したのである。その際、彼はこの「本論」中篇のタイトルだけを上篇に變更し、結局「本論」上・下二篇として『居士集』卷十七に收めたのであった。削除された一篇は、後に『居士外集』卷九に收められた。

そこで本章に於いては、「本論」上・中・下三篇のうち、歐陽脩がなぜ上篇のみを『居士集』編纂の際に削除したのかということについて、それぞれの作品內容を比較檢討することによって、具體的に考えてゆきたい。

ところで、「本論」というタイトルに於ける〝本〟の意味とは、一言を以て蔽えば〝本源〟の謂いである。そこで、「本論」上・中・下三篇から、かかる〝本〟の意義に通ずる箇所を擧げると次の通りである。

。天下の事、本末有り。（上篇）

。然らば則ち禮義は佛に勝つの本なり。（中篇）

。故に曰く、其の本を修めて以て之に勝つ。（下篇）

言うまでもなく、これらの記述は、實にそれぞれの作品の主題となっていることに氣づく。從って、歐陽脩はかかる三篇を全て「本論」と名づけたのだと言えよう。

そこで、こうした主題を中心に、それぞれの作品内容をまとめておく。先ず、上篇に於いて、天下の事には本末があり、世を治める者は、その本末によって先後を知らなければならないと言う。そして、先に當る「財」・「兵」・「立制」・「任人」・「尊名以厲賢」の五つを欠かしては、世の中は治まらないのだと述べる。かくの如く、上篇ではいわば治世の本源を論じる。

一方、中篇に於いては、その冒頭で、

佛法は中國の患と爲ること千餘歳。

と述べることから分明な如く、所謂排佛の議論を展開する。そのなかでは、佛教の不當なる様子や世間で佛教が蔓延している有様を述べ、最後に左の様に結論づけて文を結ぶ。

然らば則ち禮義は佛に勝つの本なり。今、一介の士、禮義を知る者、尚ほ能く之が爲めに屈せず。天下をして

皆禮義を知らしめば、則ち之に勝たん。此れ自然の勢なり。

つまり、歐陽脩に於いて儒教の禮義を振興することは、取りも直さず佛教を排斥することと表裏一體なのである。

また、下篇に於いても、中篇と同様に排佛を熱っぽく論じあげる。そこでは、冒頭から世間で佛教が流行している様を在り在りと述べる一方、禮義が毫も流行していないことについて次の如く言う。

佛の説、人耳に熟し、其の心に入ること久し。禮義の事に至りては、則ち未だ嘗て見聞せず。今、將に衆に號して、汝の佛を禁じて吾が禮義を爲せと曰はば、則ち民將に駭きて走らんとす。

そこで歐陽脩は、佛教に溺れた世の中を救うために、

故に曰く、其の本（禮義）を修めて以て之（佛教）に勝つ。

と、自らの見解を端的に、かつ直截的に提出して文を終えるのである。

以上を要するに、「本論」上篇では、治世の本源を、中・下篇では佛に勝つ本源をそれぞれ論じており、内容からみると、上篇と中・下二篇とは全く繋がりがないと言うことができる。のみならず、中・下二篇は、その表現面に於いても共通點が甚だ多い。たとえば、類似した表現として、次の四箇所が擧げられる。

（。佛法爲中國患千餘歲（中篇）
。將曰佛來千餘歲　（下篇）
/。……無所施於吾民矣。此亦自然之勢也。（中篇）

（。傳曰物莫能兩大。自然之勢也　（下篇）
。其後所謂蒐狩婚姻喪祭鄉射之禮（中篇）
。至於所謂蒐狩婚姻喪祭鄉射之禮（下篇）
。然則將奈何、曰莫若修其本以勝之（中篇）
。救之、莫若修其本以勝之　（下篇）

ここから、中・下二篇は、表現面に於いても極めて密接な繋がりのある一連の作だと言うことができる。一方、上篇に於いては、かくの如き表現面に於ける共通點も全く見出されない。

歐陽脩は、その最初、ただ單に所謂本源に關する論という意味で、「本論」上・中・下と一括して考えていたに過ぎなかった。ところが、その後彼は『居士集』編纂に當って、上篇を削除した。これは卽ち、治世の本源を論じた上篇と、佛教に勝つ本源を論じた中・下篇とでは、既にみてきた様に內容・表現兩面に於いて、大きな懸隔があったためだと言える。

ところで、周知の如く歐陽脩は、生涯繼續して經書を研究し續けた生粹の儒學者であった。當然の如く、儒學者歐陽脩にとって佛教は決して容認できるものではなかった。しかも、當時佛教は巷閒に流行しており、彼にとって排佛は生涯の課題であった。從って、彼は『居士集』編纂の際に、佛教の排斥を極めて強く意識していたと考えられる。そして、彼の文集中に於いて、排佛を最も强烈に具象化した作品こそ、この「本論」中・下二篇なのである。とすれば、彼は排佛とは毫も關係のない上篇と、それに決然と立ち向うことを表明する中・下篇とを一括して

文集に配置することには、強く抵抗を感じたであろう。つまり、「本論」上・中・下三篇を順に配列することによって、冗漫な感を讀者に抱かせるよりも、上篇を完全に削除し、中・下二篇のみとすることにより、恰もそれら二作品を一条の繩の様に撚り合わせ、自身の排佛の主張を直接的に讀み手に訴えようと意圖したのである。

かくの如く『居士集』に於いては、歐陽脩がそれを編纂した最晩年の思想を色濃く反映しつつ、形成されたという側面も見逃せない。

四

これまでみてきた様に、歐陽脩は『居士集』を編纂する際に、「易或問」に於いては、若い頃に作った三篇のうちの一篇を別の一篇と入れ替え、また「本論」の場合では、三篇のうちの一篇を完全に削除した。しかし、本章で考察の對象とする「正統論」に於いては、內容の改變、作品間の配列の變更等が行なわれており、如上の二例よりやや複雜な様相を呈する。

『居士集』には、「正統論」に關連する作品として、「正統論」序論・上篇・下篇、及び「或問」・「魏梁解」の計五篇が收められている。そのことに對して、『居士集』卷十六の卷末に附する丁朝佐の校勘では次の様に述べる。

考ふるに「正統論」は、初め「原正統」・「明正統」・「秦」・「魏」・「東晉」・「後魏」・「梁」論凡そ七篇有り。又、「正統後論」二篇、「或問」一篇、「魏梁解」一篇、「正統辨」二篇有り。『居士集』を編定する時に當り、「原正統」等の論を刪り、上・下篇と爲して、繼ぐに「或問」、「魏梁解」を以てす。餘篇は削去せられたと雖

も、世に傳はる。今、外集に附す。

こうして削られた「原正統論」等の作品は、『居士外集』巻九に收められた。更に、この『居士外集』の校勘には、次の如き注目すべき記述がある。

慶曆四年、京師にて『宋文粹』十五卷を刊す。皆、一時の名公の古文にして、「正統論」七篇は焉に在り。蓋し公の初本なるは、外集の此の卷なり。則ち公の自ら改むる所は、『居士集』十七卷(7)に至りて、方に定本と爲る。今、竝びに之を存す。學ぶ者をして考有らしむ。

以上を考え合わせると、「正統論」に關する作品は、先ずその初め「原正統論」・「明正統論」・「秦論」・「魏論」・「東晉論」・「後魏論」・「梁論」の七篇があり、それらは慶曆四年（一〇四四）に刊行された『宋文粹』に收錄された。本章では、これら一連の作を便宜上A群と呼ぶことにする。更に、こうした作品以外に、「正統後論」二篇、「或問」一篇、「魏梁解」一篇、「正統辨」二篇があった。これらを本章では、便宜上B群とする。

歐陽脩は、『居士集』を編定するに當り、A群の「原正統論」以下「梁論」に至るまでの七篇を整理し直して、「正統論」上・下二篇とし、それにB群の「或問」・「魏梁解」を加えて『居士集』に收錄したのであった。しかも『居士集』巻十六には、「正統論」上・下篇の前に、更に「序論」一篇を新たに作って配置した。從って『居士集』には、「正統論」序論・上篇・下篇、「或問」・「魏梁解」の合わせて五篇が收められていることになる。ちなみに、B群の「正統後論」二篇は、今日『居士集』竝びに『居士外集』のどちらにも收錄されていない。よって、本章では考察の對象外とした。

ところで先ず、歐陽脩が正統問題に對して深い關心を抱いた理由、換言すれば「正統論」を創作するに至った動機について考えてみよう。彼は、「正統論」序論のなかで、そのことについて端的かつ明晰に論及する。卽ち、薛居正が『舊五代史』を編纂し、竝びに李昉が前世の年號を編次して一書を作った時、彼らは紛うことなく五代の梁を僞朝と看做した。このことに對して、歐陽脩は强く疑問を投げかけたのである。曰く、

梁、僞と爲さば、則ち史は宜しく帝紀と爲すべからず、而も亦た五代と曰ふ者無し。理に於いて安からず。

「正統論」を考えるうえで、重要な關鍵となるのは、この樣に梁を如何に取り扱うかが「正統論」創作の出發點となったということである。つまり、薛居正や李昉の如き五代の梁に對する不合理な扱い方を直接の契機とすることによって、彼は今一度、宋以前の全ての國家の正統性について檢討し直したのだと言えよう。

さて、歐陽脩は、慶曆四年（一〇四四）以前に創作し、『宋文粹』に收錄された「原正統論」以下「梁論」に至るA群の七篇、及びそれ以降に作った[8]B群の「或問」・「魏梁解」・「正統辨」二篇のうち、『居士集』編纂の際に、A群を「正統論」上・下二篇にまとめ、B群から「或問」・「魏梁解」を選んで、自己の文集中に收錄した。では、彼が先行の作品全てをそのまま『居士集』に收錄するのではなく、この樣にそれらを修改し、あるいは選別して收錄したのは、一體なぜであろうか。

このことについて考えるために、A群・B群の十一篇の作品、竝びに『居士集』編纂時に作った「正統論」序論・上・下各篇を讀み合わせると、歷代王朝の正統性に對する彼の見解が少しく變化しているのに氣づく。そのなかでも、とりわけ着目すべきことは、梁を含めた五代に對する見方の決定的變化である。A群の「明正統論」では、

正統の説は曰く、堯・舜・夏・商・周・秦・漢・魏・晉にして絶ゆ。此れ由り天下大いに亂る。（中略）然る後、天下合して一と爲りて復た其の統を得。故に隋の開皇九年自り、復た其の統を正して曰く、隋・唐・梁・後唐・晉・漢・周と。

と述べることから分明な様に、五代の梁・唐・晉・漢・周の各王朝を全て正統と看做している。ところが、『居士集』編纂時に歐陽脩が作った「正統論」下では次の如く言う。

夫れ梁は固より正統を得ず。而して唐・晉・漢・周何を以て之を得ん。今、皆黜く。

ここでは、梁のみならず、五代の各王朝を全て黜けてしまう。かくの如く、彼は以前の自らの五代に對する見解を全面的に否定した。つまり、慶曆四年（一〇四四）以前に作った「明正統論」に於いては、梁を含めた五代の各王朝を正統と看做していたけれども、晩年に『居士集』を編纂する際に書き替えた「正統論」下に於いては、五代は皆賊亂の君であることを以て、全て正統ではないと結論づけたのである。(9) してみれば、歐陽脩は慶曆四年以前の作品に於ける梁を含めた五代に對する自己の見解を訂正すべく、『居士集』編纂時に「正統論」を今一度書き直したのではなかろうか。もちろん、「正統論」を書き替えた理由としては、他にもたとえば魏に對する見解の修正や「明正統論」と「正統辨」との見解の齟齬等を擧げることもできよう。しかしながら、既にみてきた様に、梁を如何に捉えるかということこそが「正統論」を執筆するに至った直接かつ最大の要因であった。とすれば、梁を含めた五代に對する歐陽脩の見解がいわば百八十度轉回したことは、『居士集』編纂時に彼が「正統論」關係の作品を整理し直したことを考えるうえで、看過することのできない重要な觀點となると言えよう。

ところで、かくの如く五代に對する見方が變化した原因は、結論から先に言えば、彼が『五代史記』を執筆したためである。周知の如く、彼は景祐四年（一〇三七）三十一歳の頃から、ほぼ十八年の歳月をかけて私的に『五代史記』の執筆を行なった。それ故、梁を含めた五代の取り扱い方が極めて問題となったのである。特に、「正統論」を作る直接の契機となった梁の捉え方に關して、『五代史記』の梁本紀論贊では次の様に言う。

予、五代を論次するに至りて、獨り梁を僞とせず。而して議する者、或ひは予、大いに春秋の旨を失すと譏りて、以謂らく、梁は大惡を負ひ、當に誅絶を加ふべし。而るに反って之を進む。是れ簒を奬むるなり。春秋の志に非ざるなりと。予、之に應じて曰く、是れ春秋の志のみ。

以後、『春秋』の具體例を引用しながら、梁を僞としない議論を展開する。つまり、彼は世間の僞梁説に敢然と立ち向い、決して梁を僞とはしない態度をとるのでる。一方、歐陽脩が『居士集』に收錄した「正統論」關係の作品の一つである「魏梁解」に於いて、その冒頭から次の如く述べるのは注目してよい。

予、正統を論ずるに、魏・梁の僞と爲さざるを辨ず。議する者、或ひは予、大いに春秋の旨を失すと非る。以謂らく、魏・梁は皆、簒弑の惡を負ひ、當に誅絶を加ふべし。而るに反って之を進む。是れ簒を奬むるなり。春秋の志に非ざるなりと。予、之に應じて曰く、是れ春秋の志のみ。

この「魏梁解」に於いて、國家が亂立していることを以て、三國の魏と五代の梁とを一括して論じている以外は、前述した『五代史記』梁本紀論贊とその內容・表現が一致しているのに氣づく。『五代史記』は、十八年の歳月をかけて執筆されたので、梁本紀の部分がいつ作られたのかを特定することはできない。よって、梁本紀の論贊と「

魏梁解」の創作順序も詳らかではない。しかしながら、かかる二作品が同一の視座に立ち、極めて密接な關係にあることは着目すべきである。つまり、『五代史記』と「魏梁解」とは、切り離して考えることができない表裏一體のものと言えよう。

ところで、五代を正統と看做していた「明正統論」は、慶曆四年（一〇四四）以前に作られており、胡柯の年次考證に據れば[10]康定元年（一〇四〇）頃の作だと推定する。これは卽ち、『五代史記』を執筆し始めた景祐四年（一〇三七）の僅か三年後ということになる。だとすれば、歐陽脩は『五代史記』を執筆し始めた當初、五代を正統と認めていたと言える。そして、この頃彼はA群の「明正統論」から「梁論」に至るまでの七篇を作り、それらは慶曆四年刊行の『宋文粹』に收錄された。ところが、その後も彼は『五代史記』の執筆を續け、梁を含めた五代に對する研鑽を積んだ結果、これ迄の自己の五代に對する見方の誤謬に氣づいたのだと思われる。そこで、慶曆四年以降にB群の「魏梁解」を作り、梁に對する自己の見解を訂正し、次に『居士集』編纂時に「正統論」關係の作品を整理し直して、梁を含めた五代全體を正統ではないと位置づけたのである。[11]

更に、この樣に梁を非正統と看做せば、それは國家であると言えず、從って『五代史記』に於いて梁本紀を作る意味がなくなってしまう。それ故、彼は別にB群の「或問」を創作することによって、次に擧げる樣に『五代史記』執筆の意義を明らかにし、それをそのままの形で『居士集』に配置したのである。曰く、

或ひと問ふ、子、史記（五代史記）本紀に於いては、則ち梁を僞とせずして、之を進む。正統を論ずるに於いては、則ち梁を黜けて之を絶つ。君子の後世に信ぜらるるは、固より常に此の如くなるべきか。（中略）故に、

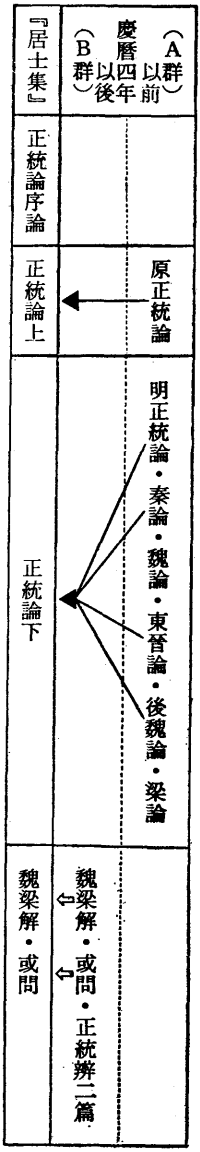
正統に於いては、則ち宜しく絶つべし。其の國に於いては、僞と爲すを得ざるは、理、當に然るべきなり。

つまり、梁は正統ではないが、一方僞とすることもできない。梁という國家があったことは歴史上事實であり、よって『春秋』に倣って『五代史記』に梁本紀を執筆したのだと言うのである。

これを要するに、五代の梁を如何に取り扱うかを直接の契機として、正統問題に對する關心が生じ、『五代史記』の執筆を通して、遂に正統に對する搖ぎ無き見解が確立したのだと言えよう。かくして、『五代史記』と、「魏梁解」・「或問」を含めた「正統論」關係の作品とは、互いに密接に依存し、組み合わさっているのである。

ここで、A群、B群及び『居士集』所收の「正統論」の創作順序と、その對應關係を圖にまとめると次の様になる。

（圖）



（←は對應關係・⇦は同一作品を示す）

『居士集』編定の際に、歐陽脩は「正統論」序論を新たに作り、それによって彼が「正統論」を創作した動機について明確に呈示した。一方「正統論」上篇に於いては、「原正統論」の內容を一部修正して繼承し、正統とはど

ういうことか、更に歴代王朝に於いて正統性が問題となる國家を具體的に指摘する。「正統論」下篇では、上篇で指摘した國家に對して、個々の事例を逐一詳細に檢討する。

以上から考えると、『居士集』に收められた「正統論」上篇及び下篇は、いわば〝總論〟と〝各論〟の構成となっていると言えよう。だとすれば、『居士集』の「正統論」は、序論・總論・各論という樣に、見事に整理し直されているのである。

更に、前圖に據ると、慶曆四年以前に作られた「魏論」と「梁論」は、その內容が「正統論」下篇に繼承されていない。それは、彼が慶曆四年以降に魏と梁を一括して、別に「魏梁解」を創作したためだと言えよう。既にみてきた如く、歐陽脩は『五代史記』の執筆に伴い、梁に對する見解を大きく修正した。爲に、彼は「魏梁解」を作ることにより、梁と同樣に國家が鼎立狀況にあった魏をも含めて、此れ迄の見解を訂正したのである。また、正統問題と絡んで『五代史記』執筆の意義を明確にした「或問」を、歐陽脩は『居士集』に是非配置せねばならなかった。ちなみに、B群の「正統辨」に於いては、正統國家として漢・唐の僅か二王朝しか認めておらず、他の作品と大きく喰い違う。從って、歐陽脩は『居士集』編纂時に削除したと思われる。

一般に、作者はより完成度の高い作品を書くことによって、それまでの所謂習作の時代を新たに塗り直し、記憶の底から消しがちである。就中、歐陽脩の「正統論」の如く、そうした時代の考え方に誤謬があった場合はなおさらである。歐陽脩は、習作時代の梁に對する見解を、『五代史記』の執筆に伴い、後に百八十度轉換させた。とすれば、彼は晩年に『居士集』を編纂した際、若い頃の自己の見解を訂正し、今一度「正統論」關係の作品を全て整

理し直す必要があったのである。

結　語

歐陽脩が晩年、眼疾を患い苦しんでいたことは、よく知られている。たとえば、熙寧元年（一〇六八）彼六十二歳の時の作である「與王文恪公」（書簡卷四）に於いては、

目を病みて、字を書するに艱し。

と述べる。また、翌年の「與韓忠獻王」（書簡卷一）に於いても、

某、目を病むを以て、執筆に艱し。

と言い、一再ならず眼病で苦しむ有様を吐露している。文人にとって、眼疾は文筆活動の大きな障壁であり、まさに致命的疾患とさえ言えよう。しかしながら、歐陽脩はかかる病氣に決して屈することなく、死ぬ僅か一ヵ月前まで、『居士集』編纂に專心していた。そこには、眼病を超克しようとする精神力と、自身の作品を自ら確定させようという執念とがまざまざと感じられる。それでは、歐陽脩をしてかくの如く文集編纂に邁進させた原動力は、一體何であったのだろうか。

このことについての手がかりを與えてくれるものは、次に示す北宋の沈作喆の『寓簡』卷八の言葉である。

歐陽公、晩年嘗て自ら平生爲る所の文を竄定す。思ひを用ふることに甚だ苦しむ。其の夫人、之に上りて曰く、何ぞ自ら此の如く苦しまんや。當に先生の嗔を畏るべきや。公、笑ひて曰く、先生の嗔を畏れず、却って

後世の笑ひを怕る。

歐陽脩は、『居士集』編纂時に他でもなく後世の人々を強く意識した。即ち、自己の作品を後世に直截かつ端的に傳えたいという氣持ちが、一心不亂に『居士集』編纂に沒頭させたのだと言えよう。いわばこうした精神力によって、彼は晩年の體力の衰えを凌駕し克服することができたのであった。

かくて、歐陽脩は『居士集』編定に當り、先行作品の片言隻語もおろそかにせず、全力を傾注してそれらを逐一檢討し直した。その際、自らの納得できない作品は、悉く削除してしまった。ところが、後世の人々がかかる作品を丹念に集めた結果、今日我々は『居士外集』中に、それらの歐陽脩が刪除した作品をも目にすることができる。これは、恐らく歐陽脩にとっては、全く予期しないことだったであろう。しかしながら、我々は後人によって『居士外集』に收められた作品を通して、却って歐陽脩の『居士集』編纂の意圖を窺うことができるのである。もちろん、彼の文集編纂の意圖を考えるうえで、他にも周必大らの校勘記にいう、『居士集』所收の作品に於ける字句の些少の修改等も、十分に考慮すべきであろう。しかし、小論でとり擧げた「易或問」・「本論」・「正統論」にみられる、歐陽脩の大幅な修改作業によっても、彼の『居士集』編纂の意圖が如實に窺えるのである。

たとえば、「易或問」に於いては、若い頃の『易』に對する見解を、その後一層發展させた彼が、『居士集』編纂時に先行作品の入れ替えを行なったことによって、自己の見解を克明に纏めようと意圖していたことが窺える。また、「本論」の一篇を削除したことは、歐陽脩が『居士集』編纂當時の思想を、直接的に自身の文集中に反映させようとしたと言える。更に「正統論」に於いては、若い頃の自己の考え方の誤謬を訂正し、今一度先行の作品を整

理し直そうとした彼の意圖が明瞭に讀みとれるのである。そしてかかる修改作業こそ、まさに歐陽脩が自らの考えを、より明確に後世に傳えようと強く意識したために爲されたものに他ならない。つまり、彼は『居士集』中に自己の正確な見解を收斂したのである。

果して然り、歐陽脩の『居士集』は、今日まで九百年餘の時閒の經過にも色褪せることなく、彼の深い智慧と確かな洞察に滿ち溢れた文集として、今日の我々をも大いに裨益する知的遺產として繼承されている。

（一九八八・一〇・四）

（注）

（1）胡柯の「歐陽文忠公年譜」では、その最後に附記された跋に於いて、「居士集五十卷、公所定也」と言う。一方、『直齋書錄解題』卷十七、別集類・中では次の樣に述べる。「居士集、歐公手所定也」。

（2）復旦學報（社會科學）一九八五―一。尙お、先行の歐陽脩研究の著書・論文については、拙稿「歐陽脩研究論著目錄稿」（『中國文學論集』十六、一九八七）參照。

（3）『居士集』各卷末には、「男發等編定」という記述がある。これは、後述する樣に歐陽脩が晚年に眼疾等を患い、文集編纂に困難を來たしており、從って歐陽脩の息子發らがそれを手傳ったためだろうと思われる。ただ、歐陽脩の文集である『居士集』は、あくまで歐陽脩の意向にそって編纂されたのは言うまでもない。

（4）小論では、テキストとして天理圖書館に所藏されている周必大編集の南宋刊本『歐陽文忠公文集』を用い、適宜四部叢刊本を參照した。

（5）歐陽脩の年譜を制作した南宋の胡柯は、また歐陽脩の大部分の作品の制作年も推定しており、それは今『歐陽文忠公文集』の目錄部分に附記されている。

（6）『中國文學論集』十六、一九八七年。

（7）『居士集』では、「正統論」關係の作品は、卷十六と卷十七に收められている。卷十六には「正統論」序論・上・下・「或問」が、そして卷十七には「魏梁解」がそれぞれ收錄されている。

（8）たとえば、後述する樣に「或問」と『五代史記』の記述

の類似、あるいは慶暦四年以前に作られた「明正統論」と、「或問」・「魏梁解」に於ける梁に對する見解の相違、更にはB群の作品が『宋文粹』に收錄されていないということ等を考え合わせると、A群の作品の後にB群の作品が作られたのは間違いない。

（9）ただこれには少しく經緯があり、慶暦四年以後に作られたB群の「或問」・「魏梁解」の中では、既に梁についてのみ正統ではないと言及していた。從って「正統論」下は、こうした「或問」・「魏梁解」の見解を更に五代全體に敷衍させたものと思われる。

（10）注（5）參照。

（11）ちなみに、「魏梁解」に於いては、魏及び梁に對する見解のみで、五代全體に對する言及はない。つまり、晩年に「正統論」を書き替えた際に、初めて五代全體に論及したのである。ところで、重澤俊郎氏は「歐陽脩の正統論」（東方學會創立二十五周年紀念東方學論集、一九七二）のなかで「歐陽脩の正統問題を主題とする論說は、はじめ七篇に分けて述べられたものが、後に現在の「正統論」三篇の形に改編されたものと見られている。しかし內容上の本質的な變化はない。」と述べておられる。この所說は、既に小論の考察から明らかな樣に少しく訂正を要すると思われる。